

ジャーナリスト評論家
文=武田徹
撮影=小原孝博

かつての王国 沖縄の足跡を辿る

テーマ書評 ⑨

沖縄でのサミット開催は両刃の剣だ。それは沖縄を注目させる契機になるが、同時に隠蔽と忘却をもたらす可能性も濃厚だ。

開催が近づくにつれ会場準備の様子が連日テレビに映し出されるようになつた。その映像を見るたびに既視感を覚える。一九七五年の沖縄海洋博のときも会場の風景が映され、開催を喜ぶ沖縄の人々が盛んに報じられていた。

海洋博開催もサミット同様に日本政府から沖縄へのプレゼントとしての色彩が濃く、公共投資事業や観光収入で沖縄経済は潤つたはずだ。だが、それは毒を含むプレゼントでもあった。政治意識を強く持たない本土の人間にとつて海洋博以降の沖縄は「海洋リゾート」のイメージ一色に染められてしまう。こうした展開を導くうえで「海洋博開催に沸く明るい沖縄」報道が、果たした効果は計り知れない。そして今度もまた同じ轍が踏まれる恐れがある。「サミット開催に沸く沖縄」報道が、多くの米軍基地を抱え、有事の際には戦闘の矢面に立たれる沖縄の実情についての問題意識を薄れさせはないか。

ここでは、そんな隠蔽・忘却のメカニズムにあくまでも抗いたいと望む人に格好の本を紹介しよう。まず小熊英二著『日本人の境界』(新曜社)。近代日本圏が外部と接する境界地帯だった北海道



〈日本人の境界
小熊英二著
新曜社
本体価格5800円



沖縄返還とは
何だったのか
—日米戦後
交渉の中での
—
Iwao Tajima著
NHKブックス
本体価格970円



ひめゆり忠臣蔵
増補新版
吉田司著
太田出版
本体価格2000円

の沖縄を語るだけだからだろう。

我部政明著『沖縄返還とは何だったのか』(日本放送出版協会)は非公開の時勢が切れ、次々に閲覧可能となっている国家安全保障会議メモを米国のアーカイブス(公文書保管所)の中から発掘し、沖縄返還交渉の過程でどのようなやりとりが日本首脳間で繰り広げられたかを示す。米国側は返還後も從来どおり基地の自由使用が認められることを望んだ。日本側は国内世論の支持を得るためにあくまでも「核抜き」返還にこだわった。終戦交渉を有利に進めたのはアメリカだった。日本側は遮断時点での核撤去さえ実現できればと、当初から財政、経済取引で米国に大幅な譲歩を示しており、核配備以外の基地の自由使用についても事実上認めてしまう。こうした経緯が秘密文書の詳細な検討によって赤裸々になつていく。もしも返還交渉がこうした展開を辿らず、沖縄での米軍基地の使用条件に制限がないし、米兵による暴行事件が発生して加える権利を日本側が獲得できていたら。しばしば問題となつてきた県道越え射撃演習を中止させられたかもしれない。核の撤去といつ「大きな」問題解決に夢中になった日本政府の外交政策によって、基地との摩擦という「小さな」しかし実際の痛みを伴う問題に沖縄の人々が悩まされ続ける結果になつた。ほんのいい。もつとも日本政府側の舞台裏が暴かれるだけでは不十分だ。沖縄の実像に近づくには沖縄自身の神話のエールもまた

サミットに沸いた
戦闘の矢面に立つ
実情について、しまえば、
サミットの報道は、
終わつてしまえば、
有事の際に立つ
戦闘の矢面に立つ
実情について、
薄れさせまいか

琉球処分以後、沖縄は日本の版図に組み込まれるが、それで沖縄の人々が「日本人」になれたかといえばそうではない。政府は沖縄を「文明化」以前にまで「日本化」の要がある地域と考え、たとえば内地ではすでに洋装が普及していたのに、沖縄では和装着用を徹底させようとする。

剝がす必要がある。

その意味で抜きにできない一冊が吉田司著『ひめゆり忠臣蔵』(太田出版)だろ。『戦争の犠牲者としての沖縄』のイメージがいかに戦後になって捏造されたかを暴いたこの本はすでに満身創痍である。『ひめゆり忠臣蔵』は、沖縄関係者からクレームがありながら「核抜き」返還を示すためにあくまでも核配備を認められることを望んだ。日本側は遮断時点での核撤去さえ実現できればと、当初から財政、経済取引で米国に大幅な譲歩を示しており、核配備以外の基地の自由使用についても事実上認めてしまう。こうした経緯が秘密文書の詳細な検討によって赤裸々になつていく。もしも返還交渉がこうした展開を辿らず、沖縄での米軍基地の使用条件に制限がないし、米兵による暴行事件が発生して加える権利を日本側が獲得できていたら。しばしば問題となつてきた県道越え射撃演習を中止させられたかもしれない。核の撤去といつ「大きな」問題解決に夢中になった日本政府の外交政策によって、基地との摩擦という「小さな」しかし実際の痛みを伴う問題に沖縄の人々が悩まされ続ける結果になつた。ほんのいい。

もつとも日本政府側の舞台裏が暴かれるだけでは不十分だ。沖縄の実像に近づくには沖縄自身の神話のエールもまた

んだ悲しい文化であることはもちろん確

かである。しかし、この米軍基地の固定化の起源が、実は「核抜き」返還交渉よりさらに古く、敗戦後すぐの時期に昭和天皇自身が「沖縄の米国による占領の継続」を望むメッセージをGHQに手渡ししたときにまで遡ることは今ではよく知られている事実だ。

そのため沖縄の人々の昭和天皇觀には今なお陥りしものがあるが、安室にしてみれば混血差別の辛い記憶があつて、なにせ「君」の歌に対して複雑な感情があつたはずだ。だからこそ歌えなかつた。沈黙で貴かれた「君が代」こそ、彼女の心の歌だつたのだと言じた吉田は考へる。

しかし、安室は歌を通じてもう一度、沖縄に向かい合わなければならぬ。沖縄サミット式典でイメージソングを歌うことを故、小瀬首相から要請され、彼女はそれを受けている。吉田は書く。

「今度は『ヤマトの使者』として沖縄の、あるいは世界の舞台に立つのである。その時でもなお國境を越えた混血の子とが担ってきた歴史の重さに思いを馳せることが可能だ。見るべきポイント読むべき本をきちんと押さえておけば。

内地の日本人以上に日本人たることを求める奇妙な同化政策の背景に、それだけの作品を細かく検証していく本書は、沖縄について多くの頁を割いている。通説した印象としてあらためて痛感させられるのは「沖縄＝日本」関係の一筋縄ではない複雑さだ。一八七一年の戦闘の矢面に立つ実情について、
サミットの報道は、
終わつてしまえば、
有事の際に立つ
戦闘の矢面に立つ
実情について、
薄れさせまいか

のアイヌ居住区、朝鮮、台湾などに対する政策や、その文化的帰属について論じた作品を細かく検証していく本書は、沖縄について多くの頁を割いている。根深い沖縄人差別——沖縄の人々は日本人ではない——の意識が潜んでいたことは疑いえない。

しかしここで注目すべきは、こうした状況に対する沖縄の人々の心理だ。差別の現実の前に日本人と同化したいという願望をかえって強く抱いて、日本に忠誠を誓う動きがあった。それが沖縄の軍国主義化を用意して第二次大戦で多くの犠牲者を出すに至つたことは言うまでもない。そして大戦後はそこにアメリカという要素が絡み、さじに価値観は錯綜する。
親米、反米、親日、反日……。さまざまに思惑や感情、経済的利害関係などが絡み合いつつ交錯する「傾斜」と「反発」のベクトルを、小熊は丁寧に解きほぐして書いていく。

紛れもなく確かなのは、こうした詳細な歴史を踏まえずに展開される沖縄論は虚しいということだ。算素哲也や大江健三郎に対する沖縄側の評価が「本土の関心を沖縄に集めてくれる優れたスポーツマン」の域に留まり、「沖縄の眞の理解者」に昇格しないものその歴史に身を深く沈めることなく、おのれに見える範囲

の沖縄を語るだけだからだろう。

我部政明著『沖縄返還とは何だったのか』(日本放送出版協会)は非公開の時